

# 世界の農業機械・資材トレンド

ヨーロッパの農機実用テストの権威、ドイツ「profi」誌に掲載された世界の農機の最新情報

Sweet outcome to Case IH harvester upgrade  
オーストラリア

## 砂糖生産の切り札はケース社製IH改良型収穫機



ブラジルで製造されたケース社製IH8000シリーズのサトウキビ収穫機。牽引式と自走式の両バージョンが、2009年の発売キャンペーンでいよいよお目見えする。

IH型の設計技師たちに取材したところ、従来の7000シリーズの基本的な内部構造には原則として手を着けていない。だが、エンジンと冷却器がアップグレードされているほか、260kW/353馬力・排気量9ℓのエンジンは、修理や補修のコストを削減できるように破片が入り込まない加圧式容器に収納されている。

牽引式も自走式も新製品には操作が簡単なジョイスティックレバーが装備されている。さらに効率性を高めた油圧回路と新しいチョッパー・システムが600人の専門家によるAFS (Advanced Farming Systems) 先進農業システムに関するモニター調査によって標準装備することが決定している。ケース社は操作を単純化するために最新鋭のAFS自動誘導装置を導入している。



オーストラリアのサトウキビ産業は、ケース社製IH型収穫機8000シリーズの牽引式(写真)と自走式の性能を、間もなく評価できるようになるだろう。待ちに待った同シリーズが、2009年中にいよいよ発売されるのだ。

これまで使われてきた7000シリーズに代わる2台のプロトタイプは、ブラジル・ピラシカバ市にある同社プラントで組み立てられた後、米国・ミズーリ州で2年に渡る評価プログラムを受けていた。それももうじき終了し、オーストラリアのクイーンズランド州バンドバーグ市にあった工場で生産されたIH型サトウキビ収穫機の後継機になる。

購入希望者とIH型を扱うディーラーたちは、2008年にはブラジルに飛び、生産設備と同機が農地で稼働する様子を実際に見ている。クイーンズランド州でIH型の販売マネージャーを務めるパトリック・マクヴェイ氏は、「私たち訪問団が新型の2機種を見て感動したのは外見だけではない。何よりも作業する者に配慮して大幅に向上した高いレベルの快適性だ」と語っている。

新型の収穫機が到着する時期は、時間に追われる我が国のサトウキビ生産者にとって重要な意味を持つ。砂糖生産が主要産業のパークキン地区の場合、1200haの農地で綿花を栽培する案が検討されており、一方で大豆の生産量を増やそうという動きもある。

「私が話した顧客たちは2009年度に関して比較的楽観的で、2008年度のようなひどい状況にはならないのではないかと考えている」とマクヴェイ氏は言う。

IH型の設計技師たちに取材したところ、従来の7000シリーズの基本的な内部構造には原則として手を着けていない。だが、エンジンと冷却器がアップグレードされているほか、260kW/353馬力・排気量9ℓのエンジンは、修理や補修のコストを削減できるように破片が入り込まない加圧式容器に収納されている。

## ヴァン・アルケル氏の掃除道具

Finding drains the van Arkel way  
オランダ



水路の清掃は退屈だが重要な作業だ。しかし、水に浸りながら歩き回らなければならない。オランダの農業経営者アノウド・ヴァン・アルケル氏は、そうした作業の難点を改善すべく、土手の上から水路の清掃作業ができる革新的な装置を開発した。

この装置では、トラクタのパレットキャリアーに搭載された油圧アームの先端に作業台が取り付けられており、作業時にアルケル氏を乗せた作業台が水路の水面ぎりぎりの所まで降ろせるようになっている。2本の油圧シリンダーによってアームが伸縮し、移動する時には1本の油圧シリンダーがアームを引き上げる仕組みだ。2本のボルトを緩めるだけで作業台をキャリアーから取り外すこともできる。

作業は2人で行なうことになるが、以前よりも作業がすいぶん簡単になり、作業時間も短縮されたという。



**Ice road tractors**  
フィンランド

**氷上のトラクター**



▲フィンランド陸軍のヘリコプターと地元の潜水クラブの人々が、氷の下から旧式のフォード・トラクタを救い上げるために召集された。

▶フィンランドの農業経営者は冬の危なっかしい氷上の道に頼るより、水陸両用型のトラクタを使って夏の間に木材を運んだ方がよさそうだ。

どない。

毎年、冬になると氷の強度が足りず何台かのトラクタが氷の中で寒中水泳を楽しむのだが、規則上は氷の厚さが約40cmにならないと氷上の道路は開通しないようになっており、最悪の事態になることはほとんどない。



40年選手のフォード社製トラクタが岸から2kmにある島から木材を積んだりを引く作業をしていたが、氷結した湖上の道は6度目の運搬に耐えられず、作業員がそりとトラクタ本体もとも水深2〜3mある湖底に沈んでしまったのだ。幸運にも、1つのドアを自力で開いた作業員は脱出し、水面に出て氷上に這い上がることができた。それを発見した近隣住民が急いで地元の病院に搬送したため、彼は低体温症の治療も受けることができた。零下10度の気温の中で服はずぶ濡れになったが、作業員は急速に快方に向かった。水没した旧式のフォードも2週間の乾燥で息を吹き返した。水没したトラクタがもし最新のエレクトロニクスを満載したトラクタだったら、作業に復帰することは叶わなかったのではないだろうか。

「フィンランドの国土の80%以上は森林と湖水で占められている。これは農業経営者や請負業者にとつてかなり大きな障害となっている。ある経営者は自分の家や納屋を暖めるために湖を渡って貯木場に行かねばならず、真冬に凍結した道路を延々と走ることもししくはない。大概は問題など起きないのだが、昨年の冬は違った。」

**Are oxen the key to food security?**  
南アフリカ

**食糧安全保障の鍵は牛？**



「南アフリカ・ファーマーズ・ウイークリー」に掲載された最新のレポートの中でグレニス・エラスムス女史は、1〜2ha規模でトラクタを使用している野菜農場が経済的に生き残れるかどうか、非常に疑わしいと伝えた。グレニス・エラスムス女史は自説の裏付けとして、東ケープ州・フォートヘアにある「動物牽引センター」で行なわれた最新の研究成果を引用している。それによると1〜2ha規模の農場で1年間、牽引動物として(数頭の)雄牛を使うと5000英ポンド(約75万円)以上の利益が出るという。これは南アフリカの未開発地域にとつてかなりの高額だ。

同センターのブルース・ジューバール氏によると、この規模の農場の場合、トラクタ導入時のコストや維持費、そして高騰中の燃料価格を勘案すると荷を引く動物こそが持続可能な動力源になるそうだ。また、同センターの研究では、4頭の雄牛と鋤・馬鍬・播種機・肥料散布機など器具一式を用意した上で、コストの総額を5000英ポンド以下に抑えるために移動式の灌漑システムを利用した。有名ブランドの新品のトラクタを購入すれば、各種の装置を除いた本体価格だけでも1万5000英ポンド(約220万円)は下らない。

トラクタと牛のどちらにするか、選択の余地はあるのだろうか？

トラクタよりも安い値段で2歳の牛を買った農業経営者は、8年後に10歳の牛を肉用として売れるのだ。しかも餌代は比較的安く済み、農作業の実地訓練を受けられる雄牛がたくさんいる。牽引動物を利用した農業経営の規模は最大で14ha程度だとジューバール氏は話す。

「南アフリカ・ファーマーズ・ウイークリー」に掲載された最新のレポートの中でグレニス・エラスムス女史は、1〜2ha規模でトラクタを使用している野菜農場が経済的に生き残れるかどうか、非常に疑わしいと伝えた。グレニス・エラスムス女史は自説の裏付けとして、東ケープ州・フォートヘアにある「動物牽引センター」で行なわれた最新の研究成果を引用している。それによると1〜2ha規模の農場で1年間、牽引動物として(数頭の)雄牛を使うと5000英ポンド(約75万円)以上の利益が出るという。これは南アフリカの未開発地域にとつてかなりの高額だ。

同センターのブルース・ジューバール氏によると、この規模の農場の場合、トラクタ導入時のコストや維持費、そして高騰中の燃料価格を勘案すると荷を引く動物こそが持続可能な動力源になるそうだ。また、同センターの研究では、4頭の雄牛と鋤・馬鍬・播種機・肥料散布機など器具一式を用意した上で、コストの総額を5000英ポンド以下に抑えるために移動式の灌漑システムを利用した。有名ブランドの新品のトラクタを購入すれば、各種の装置を除いた本体価格だけでも1万5000英ポンド(約220万円)は下らない。

トラクタと牛のどちらにするか、選択の余地はあるのだろうか？

トラクタよりも安い値段で2歳の牛を買った農業経営者は、8年後に10歳の牛を肉用として売れるのだ。しかも餌代は比較的安く済み、農作業の実地訓練を受けられる雄牛がたくさんいる。牽引動物を利用した農業経営の規模は最大で14ha程度だとジューバール氏は話す。